



少年の日の思い出

学びナビ

入れ子構造 (額縁構造)
がくぶち

文学作品と時間

文学作品のできごとは、基本的に時間的な順序に従って展開されますが、一つの作品の中に、過去のできごとや物語がはさま込まれることもあります。大きな枠組み (作品) の中に、より小さなもの (できごとや物語) が入っていることから、入れ子構造とも呼ばれます。また、額縁の中の絵のようであることから、額縁構造と呼ばれることもあります。物語や小説に流れる時間を捉え、構成を把握することは、文学作品を読むうえで大事なことです。

時間と構成

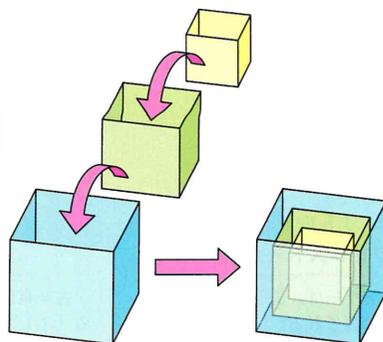
『少年の日の思い出』は、「私」と「客」が会話する現在の場面と、「客」の少年時代が語られる過去の場面によって構成されています。

現在① 「私」と「客」との会話

目標

- 行動や心情を表す言葉や語句の文脈上の意味に注意して読み、語彙を豊かにする。
- 語り手に着目して作品を読み、交流をとおして自分の考えを確かなものにする。

視点 / 桜蝶
語り手 / オツベルと象
入れ子構造 (額縁構造)



入れ子構造 (額縁構造)
物語や小説では、物語の中にさらに別の物語が入っている構造をさす。枠物語ともいう。

過去 「客」の少年時代の回想

現在②

右図のように、「現在②」の場面まで語られる構成になっていれば、「入れ子構造」（額縁構造）といえますが、「現在②」は欠落しています。完全な「入れ子構造」ではありませんが、「現在①」と「過去」の場面では、同じ人物（「客」と「僕」）が登場して、同じ「チョウチョ集め」にまつわることが語られます。また、二つの場面の最後に着目すると、「現在①」の場面では、「彼の姿は、外の闇からほとんど見分けがつかなかった。私は葉巻を吸った。外では、カエルが遠くからかん高く、闇一面に鳴いていた。」と語られています。そして「過去」の場面で、「僕」が「チョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰（つぶ）してしまった。」のは「闇の中」でした。共通して「闇」が描写されていることなどからも、過去と現在のつながりを読み取ることができます。

登場人物それぞれの物語や別の時間に起きたできごとが語られることで、読者の想像力を引き出し、読みを深められるのです。



ヒント

- 「僕」と「エーミール」のチョウチョに対する見方や価値観がわかる言葉を抜き出してみよう。
- 「エーミール」に対する語り方について、気がついた点をあげてみよう。

▼ P 261 平みちるべ 1 5



少年の日の思い出

ヘルマン・ヘッセ

高橋 健二 訳

客は夕方の散歩から帰って、私の書齋で私のそばに腰かけていた。昼間の明るさは消えうせようとしていた。窓の外には、色あせた湖が、丘の多い岸に鋭く縁取られて、遠くかなたまで広がっていた。ちょうど、私の末の男の子が、おやすみを言ったところだったので、私たちは子どもや幼い日の思い出について話し合った。

「子どもができてから、自分の幼年時代のいろいろの習慣や楽しみごとがまたよみがえってきたよ。それどころか、一年前から、僕はまた、チョウチヨ集めをやっているよ。お目にかけてようか。」と私は言った。

彼が見せてほしいと言ったので、私は収集の入っている軽い厚紙の箱を取りに行った。最初の箱を開けてみて、初めて、もうすっかり暗くなっているのに気づき、

意 色あせる
意 縁取る



私はランプを取ってマッチを擦^すった。すると、たちまち外の景色は闇に沈んでしまい、窓いっぱいには不透明な青い夜色に閉ざされてしまった。

私のチョウチヨは、明るいランプの光を受けて、箱の中から、きらびやかに光り輝^{かがや}いた。私たちはその上に体をかがめて、美しい形や濃いみごとな色を眺め、チョウの名前を言った。

「これはワモンキシタバで、ラテン名はフルミネア。こちらではごく珍^{めづ}しいやつだ。」と私は言った。

友人は一つのチョウを、ピンの付いたまま、箱の中から用心深く取り出し、羽の裏側を見た。

「妙なものだ。チョウチヨを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそえられるものはない。僕は小さい少年の頃熱情的な収集家だったものだ。」と彼は言った。

そしてチョウチヨをまたもとの場所に刺^さし、箱の蓋^{ふた}を閉じて、「もう、けっこう。」と言った。

15

10

5

▼ 擦

ワモンキシタバ

ヤガ科の蛾^がの一種。蛾と蝶には生物学的な意味での区別はなく、ドイツ語では、一つの言葉で両者を表すことができる。



ラテン名

動植物にラテン語でつける世界共通の名。学名。

▼ 珍

類 きらびやか

意 熱情

その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。その直後、私が箱をしまつて戻つてくると、彼は微笑して、巻きたばこを私に求めた。

「悪く思わないでくれたまえ。」と、それから彼は言った。「君の収集をよく見なかったけれど。僕も子どもの時、もちろん、収集していたのだが、残念ながら、自分でその思い出を汚してしまった。実際話すのも恥ずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」

彼はランプのほやの上でたばこに火をつけ、緑色のかさをランプに載せた。すると、私たちの顔は、快い薄暗がりの中に沈んだ。彼が開いた窓の縁に腰かけると、彼の姿は、外の闇からほとんど見分けがつかなかった。私は葉巻を吸った。外では、カエルが遠くからかん高く、闇一面に鳴いていた。友人はその間に次のように語った。

僕は、八つか九つの時、チョウチヨ集めを始めた。初めは特別熱心でもなく、ただはやりだったので、やっていたまでだった。ところが、十歳ぐらいになった二度めの夏には、僕は全くこの遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため他のことはすっかりすっぱかしてしまつたので、みんなは何度も、僕にそれをやめさせなければなるまい、と考えたほどだった。チョウを採りに出かけると、学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう塔の時計が鳴るのなんか、耳に入ら

15

10

5

ほや

ランプなどの火を覆う、
ガラス製の筒。

▼戯

文 むろん

意 汚す

意 とりこ



なかった。休暇になると、パンを一きれ**胴乱**に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、**駆け歩く**ことがたびたびあった。

今でも美しいチヨウチョを見ると、おりおりあの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、僕はしばしの

間、子どもだけが感じることのできる、あのなんともいえぬ、**貪**るような、うっとりした感じに**襲**われる。少年

の頃、初めてキアゲハに**忍**び寄った、あの時味わった気持ちだ。また、そういう場合、僕はすぐに幼い日の無数の瞬間を思い浮かべるのだ。強くにおう**乾**いた荒野の

焼きつくような昼下がり、庭の中の**涼**しい朝、神秘的な森の外れの夕方、僕はまるで宝を探す人のように、網を

持って待ち**伏**せていたものだ。そして美しいチヨウを見つけると、特別に**珍**しいのでなくたってかまわない、

日なたの花に止まって、色のついた羽を呼吸とともに上げ下げしているのを見つけると、**捕**らえる喜びに息もつ

15

10

5

▼ **胴乱**

採集した植物や昆虫を入れる容器。

▼ **胴**

▼ **貪**

▼ **キアゲハ**

アゲハチョウ科。羽が黄色で、黒の斑文がある。

▼ **忍**



まりそうになり、しだいに忍び寄って、輝いている色の斑点の一つ一つ、透きとおった羽の脈の一つ一つ、触角の細いとび色の毛の一つ一つが見えてくると、その緊張と歓喜ときたら、なかった。そうした微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうたびたび感じたことはなかった。

僕の両親は立派な道具なんかくれなかったから、僕は自分の収集を、古い潰れたボール紙の箱にしまっておかねばならなかった。びんの栓から切り抜いた丸いキルクを底に貼り付け、ピンをそれに留めた。こうした箱の潰れた壁の間に、僕は自分の宝物をしまっていた。初めのうち、僕は自分の収集を喜んでたびたび仲間に見せたが、他の者はガラスの蓋のある木箱や、緑色のガーゼを貼った飼育箱や、その他ぜいたくなものを持っていたので、自分の幼稚な設備を自慢することなんかできなかった。それどころか、重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしよにし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった。

ある時、僕は、僕らのところでは珍しい青いコムラサキを捕らえた。それを展翅し、乾いた時に、得意のあまり、せめて隣の子どもにだけは見せよう、という気になった。それは、中庭の向こうに住んでいる先生の息子だった。この少年は、非のうちどころがないという悪徳をもっていた。それは子どもとしては二倍も気味悪い性質だった。

▼ 斑

▼ 触

▼ 歓

▼ 栓

キルク
コルク。

▼ 貼

コムラサキ

タテハチョウ科。黒褐色の地色に黄褐色の斑文がある。



展翅

標本にするため、昆虫などの羽を広げて板に固定すること。

同 歓喜

意 非のうちどころがない

対 悪徳



彼の収集は小さく貧弱だったが、こぎれいなのと、手入
れの正確な点で一つの宝石のようなものになっていた。

彼はそのうえ、傷んだり壊れたりしたチョウの羽を、に
かわで継ぎ合わすという、非常に難しい珍しい技術を心
得ていた。とにかく、あらゆる点で、模範少年だった。

そのため、僕は妬み、嘆賞しながら彼を憎んでいた。

この少年にコムラサキを見せた。彼は専門家らしくそ

れを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒぐらい
の現金の値打ちはある、と値踏みした。しかしそれから、

彼は難癖をつけ始め、展翅の仕方が悪いとか、右の触角
が曲がっているとか、左の触角が伸びているとか言い、

そのうえ、足が二本欠けているという、もつともな欠陥
を発見した。僕はその欠点をたいしたものとは考えな

かったが、こつぴどい批評家のため、自分の獲物に対す
る喜びはかなり傷つけられた。それで僕は二度と彼に獲
物を見せなかった。

5

10

15

▼ 範

▼ 妬

▼ 鑑

▼ ペニヒ

ユーロ導入前のドイツの貨幣の単位。一ペニヒは百分の一マルクであった。

▼ 文 もつともだ

▼ 意 欠陥

二年たって、僕たちは、もう大きな少年になっていたが、僕の熱情はまだ絶頂にあった。その頃、あのエーミールがヤママユガをサナギからかえしたという噂が広まった。今日、僕の知人の一人が、百万マルクを受け継いだとか、歴史家リヴィウスのなくなった本が発見されたとかいうことを聞いたとしても、その時ほど僕は興奮しないだろう。僕たちの仲間で、ヤママユガを捕らえた者はまだなかった。僕は自分の持っていた古いチョウの本の挿絵で見たことがあるだけだった。名前を知っていたながら自分の箱にまだないチョウの中で、ヤママユガほど僕が熱烈に欲しがっていたものはなかった。幾度となく僕は本の中のあの挿絵を眺めた。一人の友達に僕にこう語った。「とび色のこのチョウが、木の幹や岩に止まっているところを、鳥や他の敵が攻撃しようとする、チョウは畳んでいる黒みがかった前羽を広げ、美しい後ろ羽を見せるだけだが、その大きな光る斑点は非常に不思議な思いがけぬ外観を呈するので、鳥は恐れをなして、手出しをやめてしまう。」と。

エーミールがこの不思議なチョウを持っているということを聞くと、僕はすっかり興奮してしまって、それが見られる時の来るのが待ちきれなくなった。食後、外出ができるようになると、すぐ僕は中庭を越えて、隣の家の四階に上っていった。そこに例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋を持っていた。それが僕に

ヤママユガ
ここではクジャクヤマ
マユのことと思われる。



リヴィウス

前五九―後一七頃。古代ローマの歴史家。『ローマ建国史』全一四二巻の著書があるが、現存するのは三五巻だけである。

▼挿

▼烈

▼幾

▼畳

意 絶頂

意 熱烈

意 外観

意 呈する

はどのくらい羨ましかったかわからない。途中で僕は、誰にも会わなかった。上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事がなかった。エーミールはいなかったのだ。ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかった。

せめて例のチョウを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまっている二つの大きな箱を手を取った。どちらの箱にも見つからなかったが、やがて、そのチョウはまだ展翅板に載っているかもしれないと思いついた。はたしてそこにあった。とび色のビロードの羽を細長い紙きれに張り伸ばされて、ヤマユガは展翅板に留められていた。僕はその上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかった。細長い紙きれの下になっていたのだ。

胸をどきどきさせながら、僕は紙きれを取りのけたい誘惑に負けて、針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずっと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたという逆らいがたい欲望を感じて、僕は生まれて初めて盗みを犯した。僕はピンをそっと引っぱった。チョウはもう乾いていたので、形は崩れなかった。僕はそれをてのひらに載せて、

▼羨

▼雅

▼誘

意 類
あいにく はたして

エーミールの部屋から持ち出した。その時、さしずめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかった。

チョウを右手に隠して、僕は階段を下りた。その時だ。下の方から誰か僕の方に上がってくるのが聞こえた。その瞬間に僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。同時に、見つけはしないかという恐ろしい不安に襲われて、僕は本能的に、獲物を隠していた手を、上着のポケットに突っ込んだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がってきたお手伝いさんと、びくびくしながらすれ違ってから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まった。

すぐに僕は、このチョウを持つていることはできない、持っていてはならない、もとに戻して、できるならなにこともなかったようにしておかねばならない、と悟った。そこで、人に出くわして見つけはしないか、ということを経験に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後にはまたエーミールの部屋の中に立っていた。僕はポケットから手を出し、チョウを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもうどんな不幸が起こったかということを知った。そして泣かんばかり

15

10

5

意 さしずめ

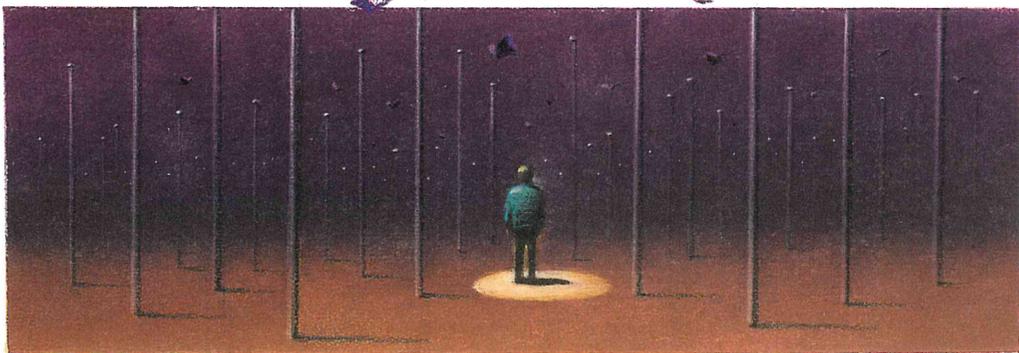
意 大それた

意 おびえる

意 出くわす

意 極度

文 泣かんばかり



だった。ヤママユガは潰れてしまったのだ。前羽が一つと触角が一本なくなっていた。ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになっていて、繕^{つくろ}うことなんか、もう思いもよらなかった。

盗みをしたという気持ちより、自分が潰してしまった美しい珍しいチョウを見ているほうが、僕の心を苦しめた。微妙なとび色がかかった羽の粉が、自分の指にくっついていてのを、僕は見た。また、ばらばらになった羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかりもとどおりにすることができたら、僕はどんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちで僕は家に帰り、夕方までうちの小さい庭の中に腰かけていたが、ついに一切を母にうち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、すでにこの告白が、どんな罰を忍ぶことより、僕にとつてつらいことだったということを感じたらしかった。

15

10

5

文 類 意
すてに ついに 繕う

「おまえは、エーミールのところに行かねばなりません。」と母はきつぱりと言った。「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえの持っている物のうちから、どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして許してもらおうように頼まねばなりません。」

あの模範少年でなくて、他の友達だったら、すぐにそうする気になれただろう。

彼が僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようもしないだろうということ、僕は前もって、はつきり感じていた。かれこれ夜になってしまったが、僕は出かける気になれなかった。母は僕が中庭にいるのを見つけて、「今日のうちでなければなりません。さあ、行きなさい！」と小声で言った。それで僕は出かけていき、エーミールは、と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、誰かがヤマムガをだいなしにしまった。悪いやつがやったのか、あるいはネコがやったのかわからない、と語った。僕はそのチョウを見せてくれと頼んだ。二人は上に上がっていった。彼はろうそくをつけた。僕はだいなしになったチョウが展翅板の上に載っているのを見た。エーミールがそれを繕うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあった。しかしそれは直すよしもなかった。触角もやはりなくなっていた。そこで、それは僕がやったのだと

15

10

5

▼丹

文
かれこれ



言い、詳しく話し、説明しようとして試みた。

すると、エーミールは激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く、ちえつと舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていたが、それから「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」と言った。

僕は彼に、僕のおもちゃをみんなやると言った。それでも彼は冷淡にかまえ、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は自分のチョウの収集を全部やると言った。しかし彼は、「けっこうだよ。僕は君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君がチョウをどんなに取り扱あつかっているか、ということを見ることができたさ。」と言った。

その瞬間、僕はすんでのところであいつの喉笛のどぶえに飛びかかるところだった。もうどうにもしようがなかった。僕は悪漢だということに決まってしまう、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのようになり、冷然と、

15 10 5

- ▼ 依 (蔑)
- ▼ 蔑 (蔑)
- ▼ 扱
- ▼ 喉
- ▼ 意 冷淡
- ▼ 同 依然
- ▼ 対 軽蔑
- ▼ 文 しようがない
- ▼ 類 冷然

正義をたてに、侮る^{あなごし}ように、僕の前に立っていた。彼は罵^{ののし}りさえしなかった。ただ僕を眺めて、軽蔑^{あやむ}していた。

その時初めて僕は、一度起きたことは、もう償^{つぐな}いのできないものだということを悟った。僕は立ち去った。母が根ほり葉ほりきこうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思った。僕は、床にお入り、と言われた。僕にとってはもう遅^{おそ}い時刻だった。だが、その前に僕は、そっと食堂に行つて、大きなとび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、闇の中で開いた。そしてチョウチヨを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰^{つぶ}してしまった。

▼罵

▼償

▼遅

▼文 ……をたてに
類 侮る



ヘルマン・ヘッセ 二二八七—一九六二
ドイツの詩人・小説家。
詩集に『青春詩集』『孤独者の音楽』、小説に『車輪の下』『デミアン』などがある。一九四六年ノーベル文学賞を受賞。



高橋 健二 二一九〇—一九九八
東京都に生まれた。ドイツ文学者。
ヘッセやケストナーなどの作品を数多く翻^{ほんやく}訳している。

《出典》『ヘッセ全集2 車輪の下』によつた。

千 みちしるべ

内容を捉えよう

① 作品の構成を確認し、現在の場面と過去の場面のできごとや心情を整理しよう。

読み深めよう

② 「客」が「もう、けっこう。」(P 249 L 16)、「実際話すのも恥ずかしいこと」(P 250 L 5)と述べたのはなぜか、考えよう。

③ 「僕」の「チョウ」や「エーミール」に対する見方・考え方と、「エーミール」の「チョウ」や「僕」に対する見方・考え方を、本文の表現を根拠こんぎょに考えよう。

参考 「チョウ」に対する表現が、「宝」「宝物」「獲物」「宝石」と使い分けられていることに着目してみよう。

④ 次の「僕」の行動について、理由を考えよう。

- (1) 「僕は生まれて初めて盗みを犯した。」(P 255 L 15)
- (2) 「チョウチョを一つ一つ取り出し、指でこなごなに押し潰してしまった。」(P 260 L 8)

自分の考えを伝え合おう

⑤ 「僕」(少年時代の「客」)の視点から語られた回想を、「私」や「エーミール」の視点から「客」に語り直したら、「客」はどのようなことに気づくだろう。友達との発言と自分の考えを結びつけながら話し合おう。

山田さん 同じ話でも、話す人によって印象が変わるのに、自分の体験を他の人から話してもらったら、どんなことに気づくかな。

参考 町村さん 自分の好き嫌いきらいとは関係なく、客観的に聞けると思う。気づいていなかった相手の気持ちにも気づけるんじゃないかな。

中内さん 少年の「僕」と大人になった「客」では、自分の体験でも印象が違ふと思うよ。

言葉・情報

● 言葉と表現

次の——線部の言葉は、どのような気持ちや踏まえて使われているか、考えよう。

- ・「とにかく、あらゆる点で、模範少年だった。」(P 253 L 5)
- ・「せめて例のチョウを見たいと、僕は中に入った。」



振り返り

(P 255 L 4)

・「あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかった。」

(P 255 L 10)

・「つまり君はそんなやつなんだな。」(P 259 L 5)

□ 「客」「僕」「エーミール」の行動や心情を、語句の意味に注意して読み取っているか。

□ 語り手や現在から語られていることに着目して作品を読み、自分の考えを確かなものにしているか。

□ 友達の発言と自分の考えを結びつけながら、語り手の視点に着目して話合ったことで、どのようなことに気づいたり、考えが変わったりしたのか。グループで交流しよう。

この教材で学ぶ漢字

249	249	249
擦	珍	戯
サツ すする	チン めずらしい 珍味	キ 戯曲
摩擦 擦り傷	珍しい客	
251	251	251
洞	貪	忍
ドウ 洞上げ	ドン むさぼる 貪欲	ニン しのぶ 忍び歩く
洞上げ	暴利を貪る	忍従
252	252	252
斑	触	歓
ハン 斑点	シヨク ふれる 接触	カン 歓喜
斑点	軽く触れる 木に触る	

252 栓 セン 消火栓

252 貼 チョウ
はる 貼付
貼り紙

253 範 ハン 範囲

253 妬 ト
ねたむ 嫉妬
嫉妬

253 鑑 カン 鑑賞

254 挿 ソウ
さす 挿入
挿し木

254 烈 レツ 烈火

254 幾 キ 幾何学
幾多

254 畳 ジョウ
たたむ 服を畳む
六畳

255 羨 うらやむ
羨ましが
る

255 雅 ガ 優雅

255 誘 ユウ
さそう 誘導
誘い水

258 丹 タン 丹念

259 依 イ 依然

259 蔑 ベツ
さげすむ
蔑み 軽蔑

259 扱 あつかう
取り扱
い

259 喉 コウ
のど 喉頭
喉元

260 罵 バ
ののしる
罵倒

260 償 ショウ
つぐなう
罪の償
い

260 遅 チ
おくれる
乗り遅
れる 遅刻
夜遅く

新出音訓

253 微笑★
傷む (いたむ)

250 微笑★
(シヨウ・えいむ)

●小学六年生の漢字

253 展 翅
253 模 範
253 専 門 家
253 認 め る
253 批 評 家
254 絶 頂
254 興 奮

254 時 刻
255 優 雅
254 興 奮